

家鄉在好遠好遠的地方

你在好遠好遠的家鄉

我在落拓的流浪中想你

你是否也在想流浪中的我

月光花

荻野目
櫻



出版社

月 光 花

荻野目 櫻 著

學 林 出 版 社

(滬)新登字113 號

責任編輯:褚大為

封面設計:傅惟本

攝 影:吳兆馥

吳筱雄

日文翻譯:佐藤 敬行

月光花

(日)荻野目 櫻 著

學林出版社出版

上海文廟路120 號

新華書店上海發行所發行

上海洪申印刷廠印刷

開本850×1156 印張3 插頁 字數 55.8 千

1994 年12 月第壹版 1994 年12 月第壹次印刷 印數:1—3000 冊

ISBN 7-80616-060-4/I·42 定價:17.00 圓



作者簡介

姓 名：荻野目 櫻

（原 名：江 纓）

年 齡：25歲

籍 貫：日本

出 生：中國・上海

血 型：B

星 座：獅子

愛 好：繪畫，鋼琴

作者曾于16歲時出版

第一本詩集《夢潮》。

現來往于日本和美國

從事翻譯和寫作。

新野 櫻



序

盡管我非常愛好詩詞，但是對於新詩，實在是門外漢，讀了荻野目 櫻女士送來的詩稿，卻深為她的濃濃的感情、沉沉的思想、淡淡的哀愁感動了。她彷彿為我打開了一道藝術的大門，使我看到了新詩的魅力，在文化領域中，這作品是具有無比生命力的。

荻野目 櫻女士原名江櫻，她出生于上海，現年二十五歲。一九八五年，當她還只有十六歲時，就出版了她的詩集《夢潮》。她在一首題為《永恆》的詩中說：

“世界上有什么是永恆？

沒有！

哲學早已把它否定了。

政治卻把它抬得很高很高”

這就是一種非凡的、透徹的思想。一個十六歲的姑娘，在一個只需要一個腦袋的社會里，見解如此不凡，是非常難能可貴的。古人說：詩言志。其實，現代的抒情詩，也不會離開了這個標準。正如在這本詩稿中所說的，大前門比外烟好，中山裝比西裝好，那真是半世紀來中國知識分子的感情，也是那個“傻父親”的逼真形象。在詩人的筆底下，感情是那樣真實，場面又那樣真實。同樣地，詩人在《異國街上》，“在靜靜蠕動的人群中”，她忽然想到了“正在梅雨家鄉”的“母親”，這裡，正是映出了詩人的那一顆赤子之心。

在中國的詩詞中，運用疊詞是出色的手法，李

清照“尋尋覓覓，冷冷清清，淒淒慘慘、戚戚”是千古名句，引人入勝。荻野目 櫻女士也很善于運用疊詞，她的《中秋》之歌，一曰“圓圓圓圓蜜蜜甜甜”，一曰“紅紅紅紅昏昏醉醉”，一曰“遠遠遠遠明明滅滅”，以此寫月餅、寫美酒、寫燈火，皓月當空，人情如醉，這三句疊詞，很能體現出詩人的功力。

但是，在讀完這本詩稿之后，使人有一種淡淡的哀愁。一個二十多歲的作者，背井離鄉，遠托異國，“父親埋于故土而母親遙遙不知歸期”，對景思人，怎么能沒有一點淡淡的哀愁呢？在我們年青一代人的身上，歷史的包袱實在是太沉重了，對於這樣一位懷有才華的詩人，當然更加多愁善感，出現在她的字里行間了。作為一個作品，使讀者讀后有這樣的同感，應當說是一種成功，因為讀者擺不脫它的魅力。

以一個八十歲的老人，受到這樣的感染，說明這本詩集的出版，一定會受到讀者的歡迎，說明我們的詩人荻野目 櫻女士，在這個領域內的潛力是非常巨大的，希望她不斷有更好的詩作問世。

是為序，以表示我的振奮和祝福。

馮英子

一九九四年九月二十九日于上海





序

大変に詩を好むとはいっても、新詩については全くの素人の私だが、荻野目 櫻 女士の詩を読んで、その豊かな感受性、重味ある思想、淡い哀愁に深く心を打たれた。彼女によって 私は このような芸術の存在を知り、新詩の魅力に気づかされた。文芸の分野で、この作品は 比類ない生命力を備えている。

荻野目 櫻 女士は原名江纓、上海生れで 今年二十五才。一九八五年 わずか十六才で 詩集《夢潮》を出版。彼女は“永恒”という詩の中で“世界に 何か永久不変なものがあるだろうか？無い！哲学では とつくに否定されている それを、政治は高く高く持ち上げている”という。これは非凡にして透徹した思想だが、この特別な知性を必要としない社会にあつて、十六才の少女の思想がこれほど非凡であるとは、本当に賞讃に値する。詩は志を言うと古人は云う、実は現代の抒情詩もまたこの基準から外れたことはない。例えば、本詩集の中で“大前門は外国タバコより好い、人民服は洋服より好い”というのは、実にこの半世紀における中国知識人の感情であり、またあの“愚かな父親”の イメージ そのものである。詩人の詩作における、感情の何と本物であり、情景の何と真実であることか。同様に、

詩人は“異国の路上で”という詩の中で、“静かにうごめく群衆の中で”彼女はふいに“ちょうど梅雨いりした故郷”の“母”に思い至った。ここには、まさに詩人の純真な心が映し出されている。

中国の詩や詞には、疊字の手法が効果的に使われており、李清照(宋代の女性詞人)の“尋尋覓覓(さがしもとめ)冷冷清清(ひっそり寂しい)淒淒慘慘戚戚(みじめでつらく苦しい)”は人を夢中にさせる千古の名句である。荻野目 櫻 女士もまた疊字を使うのが上手だ、“中秋”の歌では“圓圓圓圓蜜蜜甜甜(まるく蜜のように甘い)”、“紅紅紅紅昏昏醉醉(酒に酔い、顔はほんのり赤くなり、頭はぼうっとする)”、“遠遠遠遠明明滅滅(灯りが遠くで点滅している。”が、それぞれ月餅、美酒、灯火を描写し、夜空にかかる白い月、浮き浮きするような酔心地を表現している。この三つの疊字には、この詩人の実力が良く現れている。ところで、この詩稿を読了して感じたものは一種淡い哀愁である。故郷を離れ遠い異国での生活、“父はすでに故郷の土となり、母はいつ帰国するとも知れない”

二十数才の作者が情景に接し 人を思うとき、多少とも淡い哀愁を感じるのは当然であろう。若い世代にとって、歴史から与えられた重荷はあまりにも重い、彼女のような才能を秘めた詩人がいつそう感傷的になったことは当然で、これは、作品の字句の間からうかがうことができる。一つの作品が読者に読後このよう

な共感を覚えさせるということは、一種の成功と言うべきだ。なぜなら読者はその魅力から逃れられないのだから。

一人の八十才の老人が、これはど心を動かされたということは、この詩集の出版が読書界の歓迎を約束されたということであり、我々の詩人 荻野目 櫻 女士のこの分野での非常に大きな潜在能力を立証するものである。彼女が 今後とも 更に素晴らしい作品を発表することを祈る。

これを序とし、私の激励と祝福の意を表わす。

馮英子(現代中国の著名な作家)

十九九四年九月二十九日

上海にて



自序

遲遲難以呈交原稿，直到在學林出版社的一再催促下，我不得已地寫上自序，心中卻惶惶不安，將這本稚拙的詩集呈獻給祖國的朋友們，實在自愧它的簡陋與不足。

離開故鄉已有六七年，這些詩，是這幾年以來陸續寫下的一些真實的感觸與經歷。

詩，不在其實，而在于情。

我的詩，可以說是一些“日記詩”，所以說是一些無造作、無虛情的記實詩。

詩中有我，有我的家、我的父親母親、我的故鄉、我的流浪和我的愛情……

將真實的我呈獻給讀者，將我的憂傷和迷惘坦露于讀者，確實需要極大的勇氣和力量。在馮英子先生、崇啟先生和扶持我的廣大親朋好友的堅實后盾下，終于，以一種“丑媳總得見公婆”的心情，將它公之于衆。望得到各位朋友的指正與批評。

在寫這篇自序時，東京已是入冬，而祖國正值四十五周年國慶，燈火輝煌衆人歡娛。回到異鄉的我，實在自感像一片飄泊不定的葉子，不管是飄在東京喧嘩的街上，還是飄在拉斯維加斯奇麗的風里，飛來飛去，總感到陌生，找不到一個落腳的窩，無法安置一種撲朔迷離的心情；而只有在祖國時，我才是一個無憂無慮、笑不絕口的孩子。

所以，請接受這一本詩集，就像接受一個風

塵僕僕歸來的赤子一般，請予我以滿心的溫暖，容
我整理行裝，踏上歸鄉的路，好嗎？

荻野目 櫻

寫于日本上高地山莊

一九九四年十月

